

小学校と幼稚園の勤務経験がある教員の意識に関する事例的研究 －A市における幼保小の接続にかかわる現状を踏まえて－

杉 田 かおり*・松 井 千鶴子**

(令和2年8月24日受付；令和2年11月27日受理)

要 旨

本研究は、小学校と幼稚園の両方に勤務した経験をもつ教員にインタビュー調査を行い、その内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析した事例的研究である。調査対象である稀な経験をもつ教員の意識モデルを構築することを通して、A市における幼保小の接続にかかわる現状を踏まえ、連携を推進していくための手がかりや知見を得ることを目的とした。分析の結果、意識として、「越境による不安・葛藤」「保育者としての成長」「越境から得た信念」「小学校教育への違和感」「接続への提言」の5つのカテゴリーが生成された。越境を経験した教員は、不安や葛藤を抱えながらも、省察を深めながら保育者としての成長を遂げ、揺るぎない信念を獲得していることが分かった。また、小学校教育における当たり前に対して違和感をもち、もっと幼児教育の現場を見たり知ったりするべきだという思いを抱いていることが明らかになった。「接続への提言」には、彼らの経験とゆるぎない信念から思い描いた理想的な幼保小連携の在り方が凝縮されていることが推察できる。本研究より、幼保小の円滑な接続には、互いの保育・教育を理解し合い、子ども観を共有していくことの重要性が示唆された。

KEY WORDS

Cooperation from preschool to elementary school 幼保小連携 Teacher's awareness 教師の意識
Modified Grounded Theory Approach 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1 問題の所在

1. 1 国内外の動き

幼児期の教育から児童期への移行については、国際的に関心がもたれている。なぜなら、幼児期の経験がそれ以降の成長を支えるものであることや移行期の非連続性が後の発達にもたらす負の影響などが指摘されているからである(OECD, 2017)⁽¹⁾。日本においても、幼児期の教育と小学校教育の接続や幼保小連携は、重要な課題と認識されてきた。平成29年には、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁽²⁾において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、子どもの姿を保育者と小学校教員が共有し、援助・指導を行っていくことが求められている。一方、小学校におけるスタートカリキュラムについては、平成20年度の小学校学習指導要領でも示された通りであり、平成29年改訂の小学校学習指導要領においては、生活科のみならず、低学年の各教科等(国語科、算数科、音楽科、図画工作科、体育科、特別活動)の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に、「低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、思考の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育指導要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること」⁽³⁾と示された。幼児期に総合的な指導を通して育まれた資質・能力が、各教科等における学習に円滑に接続されるよう求められたことになる。

このような幼児期から児童期の教育の連続性を確保するための接続期カリキュラムの重要性は、国内外において認識されている。これまで、いわゆる「小1プロブレム」への対応を機に、幼保小連携についての注目と議論が高まる中、地方自治体の幼小連携体制づくり(一前・秋田, 2011)⁽⁴⁾や、幼保小連携における接続期カリキュラムの意義と課題(山口, 2016)⁽⁵⁾等の研究がなされてきた。また、幼児期に求められる指導内容についての保育者と教員の考えの相違(白神ら, 2017)⁽⁶⁾など連携の困難さも指摘されている。現在も幼稚園・保育所等と小学校との連携・接続という問題は存在しており、その課題解決に向けて、様々な取組や提案がなされている。

*上越市立上下浜小学校 **学校教育学系

1. 2 A市の現状

A市では、10年前の2009年4月からB小学校においてスタートカリキュラムの取組が始まった。令和元年度、A市内公立小学校・50校の「グランドデザイン」に幼保小の「連携」が記されているのは18校であり、「スタートカリキュラムの実施」を明記しているのは3校に留まっている。過去8年間のA市視覚的カリキュラム表（1年生）において、入学直後に接続期カリキュラムを位置付けていた学校は4校。そのうち2校が今年度も実施していることを示している。これらのことから、「小1プロブレム」の解決を目指して学習指導要領に幼小連携のさらなる重視が盛り込まれて10年を経た現在でも、A市内においては、接続期カリキュラムを明文化して取り組んでいる小学校は少ないことが分かる。

この背景として、A市を中心とする地域が生活科や総合的な学習を重視する歴史ある土地柄であることが影響している可能性がある。子ども中心の教育が浸透し、子どもの姿から教育の在り方を考える風土があるからこそ、敢えてスタートカリキュラムを導入しなくてもよいという文化があるのではないかと推測できる。

また、市内幼稚園（市立1、私立9、国立1）の担当が教育委員会・学校教育課である一方、保育園（公立40、私立17、認定こども園4）は健康福祉部・保育課の管轄となっており、行政面での分断が見られる。双方への聞き取り調査¹⁾の結果、両組織において連携や交流等は図られていないことが明らかになった。

以上から、これからのA市における幼保小の接続について考察するにあたり、幼児期の教育と小学校教育に携わった経験をもつ教員の思いや願い、教育観や子ども観を知ることが必要であり意義あることと考える。

2 研究の視点・目的

本研究では、小学校教育と幼児期の教育の両方に携わった経験をもつ教員の意識モデルを構築することを目的とする。また、それらを明らかにすることを通して、幼児期の教育と小学校教育の接続期に求められることを探究する。これにより、幼保小連携を推進するための手がかりを探ることができると考える。

3 研究の方法

3. 1 調査対象

A市内の公立小学校とA市内にあるC大学附属幼稚園の両方に勤務した経験をもつ教諭を対象とした。対象者の概要を表1-1、1-2に示す。

表1-1 調査対象者1（小学校教諭から幼稚園教諭へ）

対象者	性別	年代	小学校勤務経験	幼稚園勤務経験	全勤
D	女	40代	18	4	22
E	女	40代	17	1	18
F	男	40代	20	2	22

表1-2 調査対象者2（小学校教諭から幼稚園教諭、再び小学校教諭へ）

対象者	性別	年代	小学校勤務経験	幼稚園勤務経験	全勤
G	女	40代	15	6	21
H	女	50代	25	4	29
I	男	40代	16	5	21

3. 2 調査方法

3. 2. 1 データ収集方法

インタビューによって調査を行い、データを収集する。内容はICレコーダーとメモで記録し、逐語録を作成する。

3. 2. 2 質問項目

- ・小学校教諭から幼稚園教諭（小学校教諭から幼稚園教諭を経て再び小学校教諭）への立場の変化に伴う意識の変化
- ・接続期に大切にしたいことや心掛けていること

3. 2. 3 インタビューの時期・場所・所要時間

各調査対象者へインタビューを行った日時・場所・所要時間について、表2に示す。

表2 調査日時・場所及び所要時間

対象者	日 時	場 所	所要時間
D	2019年6月14日（金）15時30分開始	C大学附属幼稚園 園長室	約60分間
E	2019年6月21日（金）16時00分開始	同上	約50分間
F	2019年7月17日（水）16時00分開始	同上	約55分間
G	2019年8月1日（木）10時00分開始	A市立J小学校 図書室	約80分間
H	2019年9月3日（火）15時30分開始	A市立K小学校 校長室	約90分間
I	2019年9月25日（水）16時00分開始	A市立L小学校 会議室	約90分間

3. 3 分析方法

3. 3. 1 分析の枠組み

木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用する⁷⁾。本研究では、インタビューで得た質的データから、小学校と幼稚園の両方を経験した教諭の意識モデルの構築を目指す。そのため、データに密着した分析から概念形成を行うことを志向するM-GTAが適していると考えた。

3. 3. 2 分析者の視点

筆者は小学校現職教員であり、過去に6回、1年生担任としてスタートカリキュラムに取り組んだ。そのため、本研究テーマは筆者自身の経験と問題意識によって生じたものである。したがって、分析の視点には分析者である筆者の思考が影響を与えることを考慮し、調査対象者の視点と一定の距離を保ちながら解釈することに留意した。

3. 3. 3 分析の手続き

- ①インタビューデータを逐語化し、逐語録を作成する。
- ②逐語録から意味のまとまりとしてのヴァリエーションを取り出し、似通ったものを集めて分析ワークシートに転記する。
- ③転記したヴァリエーションを簡潔な文章（定義）で表し、さらにより簡潔な言葉（概念）で表す。
- ④生成された概念及び定義をヴァリエーションと照らし合わせ、適宜修正を加える。（②～④を繰り返す。）
- ⑤概念の定義やヴァリエーションの類似性や関係性からカテゴリーを生成する。
- ⑥暫定的な全体像やモデルを素描する。

分析ワークシートは、概念名、定義、ヴァリエーション、分析の視点を書き留める論理的メモからなるもので、1概念につき1ワークシートの形式で作成する。（表3参照）

4 結果

4. 1 概念生成

分析ワークシートの作成を通して18個の概念を生成した。以下に、概念名「今までとは違う自分」の分析ワークシートを例として挙げる。なお、（ ）内アルファベットはインタビュー対象者を、数字は逐語録内の順を示す。

表3 分析ワークシート例（一部抜粋）

概念名	今までとは違う自分
定 義	越境を経験したことで、価値観が変化したことを自覚している様子
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・何が大事って、やっぱり、低学年の時がすごく大事だし、もしかしたら、もっと言うと、その前が大事なかってだんだん思うようになってきて。（A 4） ・今になって分かったんです。アサガオだって、壁際にずらっと並べなくて良かったんだなって。それぐらいの柔軟さがねー。教師主導ではなく、子ども主体の学びになっていたのかなって。（B 29） ・教育観はもうガラガラガラガラと変わりましたね。まず指導ということがないですね。こっちが何とかしようとかさせようとかっていう考えは、この園はない。他の園はありますけど。附属幼稚園に関しては、気付かせるとか、失敗して学ぶとか、そんな感覚でいますので。僕は先出しルールのタイプで何か起こる前に蓋をしておく感じだったんですけど、ガラガラですよ。全部変わりましたね。（C 4） ・小学校から来た1年目の1学期は、私がしゃべっている言葉が多いと思います。しゃべっている言葉も多いし、こっちから提供する言葉が多かった。「～してみようか」「これやってみない」が多いと思います。でも、あまり効果がない。教師の提案には食いつかない。（F 20）

	・子ども観が変わったのが一番大きいかなーと思います。この学校風で言うと、本気になって取り組んでいる子どもの表情を見取る。目ですかねー。附属幼稚園で言うと夢中になって遊んでいる姿。子どもたちの雰囲気とかが何となくわかってくるようになって。その姿を引き出すと、子どもは試行錯誤を始めるし、いろんな学びを創造しようとするし、他の子もその子に引き付けられるようにして関わることによって、共に学ぶというか共に取り組むという姿が出てくる。活動やら学習に子どもたちを夢中になって取り組ませることが先決・土台だろうという思いをもつようになりましたね。(F30)
論理的 メモ	・価値観の変化を概念化。何を大事にすべきなのか、自分の中の教育観や子ども観が変化の様子が分かる。 ・「越境による不安・葛藤」を感じながらも、「保育者としての成長」を遂げた後に、自分自身を振り返り客観的に見つめ直すことで、「今までとは違う自分」という概念が生まれてくるのであろう。

4. 2 カテゴリー化

18個の概念から5個のカテゴリーを生成した。カテゴリーと概念をまとめて表4に示す。

表4 生成されたカテゴリーと概念及び定義

カテゴリー	概 念	定 義
越境による 不安・葛藤	幼児期の教育は 難しすぎる	教科書や指導内容がある小学校教育とは異なり、遊びが中心となる幼児教育に携わり保育をしていくことに難しさを感じている様子
	考えすぎて しゃべれない	環境を通して学ぶ幼児教育において、教師がどのような言葉を使い、どのように声掛けをしたらいいのかが分からずに悩む様子
	試行錯誤	越境当初、不安や葛藤を抱えながら試行錯誤をする様子
保育者とし ての成長	先輩保育者への憧れ	先輩保育者の保育に憧れの気持ちを抱き、自分もそうなりたいと願う姿
	副担任に学ぶ	副担任の先生から、園児への言葉掛けや振る舞いを学ぼうとする姿
	研修による自己研鑽	研究会等に関わる研修を通して自分自身を高めていく姿
	失敗から学ぶ	失敗を繰り返す中から学び、保育者として成長していくこと
越境から 得た信念	保育の手ごたえ	保育活動において手ごたえを感じている様子
	今までとは違う自分	越境を経験したことで、価値観が変化したことを自覚している様子
	基盤は子どもの安心感	保育でも学校教育でも、子どもが安心感をもって過ごすことが基盤であるという教師の信念
小学校教育 への違和感	見守りと待ち	子どもをどうかしようとするのではなく、子どもの様子をよく見ながら自分の出を考えようとする
	小学校の当たり前	小学校で当たり前に行われていることに対して、違和感をもつ様子
	教師主導	幼児期の教育と比べて、小学校教育では担任が子どもを東ねよう・子どもに教えようとする意識が強すぎる
接続への 提言	見るべき、知るべき	小学校教員、特に1年生担任は、幼児教育の現場へ出向き入学前の子どもの様子を見ておくべきだという思い
	連携の思い描き	理想的な幼保小連携の在り方について、自分の経験をもとに思い描いていること
	1年生担任が 工夫できること	幼児教育で学んだ経験から、学校教育について、特に1年生担任として工夫できそうなこと
	4月に大切にしたいこと	小学校入学直後の1か月間に大切にしたいと思うこと
	生活科への期待	幼児教育の遊びと生活科の学びには重なる部分が多く、接続・連携の鍵になり得るという期待をもつこと

4. 3 カテゴリーが表すこと

生成された5個のカテゴリーが表していることについて説明する。なお、〈 〉は概念、【 】はカテゴリーを示す。(概念にかかわりの深い特徴的な文言に筆者が下線)

4. 3. 1 【越境による不安・葛藤】

小学校からC大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園）に異動したばかりの教員は、遊びが中心となる幼児教育の世界に入って〈幼児期の教育は難しすぎる〉と感じている。「まずその遊びを、どうやって遊ばばいいのってところからですね。何をして、どうやってっていう（E1）」や「環境を通して行う教育っていうのが難しすぎて（A3）」という語りからは、指導内容や教科書ありきの小学校教育との違いに戸惑い思い悩む姿が浮かび上がってくる。幼児

期の教育と小学校教育には、教育課程の構成原理や指導方法で様々な違いがある。だから、異動してきたばかりの頃は、園児を目の前にした時、〈考えすぎてしゃべれない〉という状況が生まれてくる。「自分がしゃべる言葉が通じないというところにギャップを感じました（F16）」「4月の頃なんて何言ってもダメでしたね（C10）」のように小学生と園児の差を感じる姿もある。附属幼稚園では、教員の援助と環境構成として“待つ姿勢”と“言葉かけ”を大切にしている。そのため、「どこまで言っているのかな、とかすっごい考えて（A23）」「怖くて言えないっていうものもあるかも知れない、私もそうだったから（A28）」という語りも見られた。そのような状況の中で、教員は環境の一部であり遊び込む子どもの援助者であろうと〈試行錯誤〉を繰り返しながら教育活動を行ってきたことが伝わってくる。以上のことから、小学校から幼稚園または幼稚園から小学校へ異動をした教員は、【越境による不安・葛藤】を抱えながら教育に携わっていると考えられる。

4. 3. 2 【保育者としての成長】

附属幼稚園の学級担任は3名おり、それぞれが3歳児・4歳児・5歳児を担当している。しかし、その枠組は緩やかで園の職員全員で保育を行っているという印象を受ける。そのため、それぞれの教員の振る舞いを目にする機会も多く〈先輩保育者への憧れ〉を抱きやすい環境にある。「なかなかI先生みたいにできなくて。どうすればこんな素敵な声掛けができるんだろう。どうすれば、こんなに子どもたちが本当に心から遊び込めるんだろう。こんな保育したいなって思って（E20）」「U先生の発する言葉ですよね。表情も。子どもと同じタイミングで笑い、子どもと同じタイミングで悩み、時折スッって引くんですね。そしてちょっと俯瞰して見て、どこに梃を入れようかなみたいな感じで動き出します。それが絶妙だっていうか（F24）」のように、自分も憧れの先輩保育者のようになりたいという願いをもっていたことが分かる。

また、附属幼稚園には各学級に副担任が1名ずつおり、担任と二人三脚で保育を行っている。「副担任さんに教わりながら、副担任さんの様子を見ながら、あ、こういう風に言葉を掛けるといいのね、とか。保育の部分のところとかをね、副担任さんの姿から学ばせていただきました（E1）」「私より経験のある副担任の先生たちがしゃべっている言葉を聞いて、自分も真似をするようにしていました（A22）」「最初の一週間は副担任の先生に全部やってもらったんですよ。僕は見習いみたいな感じで1週間ずっと見ていて（F16）」という語りから、異動したばかりの教員にとって副担任の存在が非常に大きかったことが分かる。そして、保育のいろはを〈副担任から学ぶ〉姿を見出すことができる。

附属幼稚園という特質上、年に一度研究会を開催しなくてはならない。「研究会で人がいっぱいいらっしゃって、附属幼稚園の保育っていう目で見られるし、上手く文章書けないけど、事例とか起こして意味づけて紀要とかも作っていかなくちゃいけないし、やっぱり研究として形に残していかなくちゃいけないし（E34）」「ホント、修行です。子どもの姿を見ながら意味づけていかなくちゃならないところはあるんで、書くとか。研究だから事例とか書かなくちゃいけないじゃないですか（D22）」のような重圧を感じている様子もうかがえる。しかし、附属幼稚園というプレッシャーを感じながらも、「今年の研究テーマが『子どもの育ちを支える評価』なので『これ出してみたい』『こういうかかわりしてみたい』とか上手くいったことや上手くいかなかったことなどを話す時間を10分とか15分とか取るようにして、副担任の先生と必ず1日を振り返るようにしています。貴重な時間です（B13）」や「遊び込むことが、子どもの内面の育ちとどんな力につながるか、研究で見えてきていたから、とにかく遊びが充実するような支援をしてきたんです。もちろん、個も知らなくちゃいけないんだけど、今何を出したらいいのか（環境づくり）、手を出すのか出さないのか（自分の出）、言葉をどうするか（言葉掛け）とかを、一生懸命考えてきていて（A19）」のように、〈研修による自己研鑽〉を続けている姿が明らかになった。「いろいろ失敗を繰り返しながら、会得している部分の方が多いですよ（C11）」という〈失敗から学ぶ〉ことを繰り返しながら、徐々に〈保育の手ごたえ〉を感じていく様子も感じ取ることができた。これら5個の概念から、【保育者としての成長】を遂げていく教員の姿を描き出すことができる。

4. 3. 3 【越境から得た信念】

小学校教育を離れ幼児期の教育に携わるようになった教員は、それまでの自分の中にあつた価値観が変化したことを自覚している。「教育観はもうガラガラガラガラと変わりましたね。まず指導ということがないですよ。こっちが何とかしようとかさせようとかっていう考えは、この園はない。他の園はありますけど。附属幼稚園に関しては、気付かせるとか、失敗して学ぶとか、そんな感覚でいますので。僕は先出しルールのタイプで何か起こる前に蓋をしておく感じだったんですけど、ガラガラですよ。全部変わりましたね（C4）」や「子ども観が変わったのが一番大きいかなーと思います。この学校風で言うと、本気になって取り組んでいる子どもの表情を見取る。目ですかねー。附属幼稚園でいうと夢中になって遊んでいる姿。子どもたちの雰囲気とかが何となくわかってくるようになって。その姿を引き出すと、子どもは試行錯誤を始めるし、いろんな学びを創造しようとするし、他の子どもその子に引き付けら

れるようにして関わることによって、共に学ぶというか共に取り組むという姿が出てくる。活動やら学習に子どもたちをどう夢中になって取り組ませることが先決・土台だろうという思いをもつようになりましたね（F30）」のように、〈今までとは違う自分〉を感じている。そして、幼児期の教育においても小学校教育においても、〈基盤は子どもの安心感〉であるという信念を抱いている。また、教員の姿勢として大切になるのは、〈見守りと待ち〉であることを確信している。つまり、【越境による不安・葛藤】を抱えながらも、【保育者としての成長】を遂げてきた教員は、それぞれの中に確固たる【越境から得た信念】を獲得していくのだと考えられる。

4. 3. 4 【小学校教育への違和感】

小学校の教員は廊下を走っている児童に対して「廊下は歩きます」と教え、「なぜ走ってはいけないのか」を説きがちである。一方、幼稚園の教員は「廊下走りたいんだよねー、いい直線だもんねー（D46）」と、まず子どもの思いに共感する。幼稚園から再び小学校に戻った教員は次のように語っている。「学校にいろんなきまりとかルールとかあって、それを一つ一つ『こうです』って教えるよりも、経験して失敗して怒られてやった方が分かるんじゃないかな。だからあんまりギュウギュウにやるよりは、時間をかけて、あんまり怒らず（D55）」と。他にも、「立ち位置もそうですよね。小学校って昔ながらの習慣・講義スタイルですよ。教員が前面と真ん中に立っているんですけど、幼稚園の場合は話しかける時はできるだけ斜め後ろからとかで。あんまり真正面で『どう？』なんてしないでしょね（C19）」「小学校ならカリキュラムがあって1時間の中で指導内容とかもありますよね。でも、1年生あたりだともう少し柔軟にしてもよかったなーって思っ。今にして思うと、そうやってもっと自由にいろんなことをして育った方が、それこそいろんな気づきが生まれるんだなーって（B28）」のように、〈小学校の当たり前〉に対してもっと柔軟に対応すべきだという思いを抱いている。特に、「自分は先生だったんだねー、みたいな。子どもとの距離感が違いますよね。小学校は、教員1対全員で、基本教員は絶えず全体を見ている。授業でも子どもを動かす時でも全体。クラスという全体から誰も零れ落ちることがないように配慮してきたんですけど、ここに来て、全体なんて意味をなさないってことが分かりました（A15）」という語りに象徴されるような〈教師主導〉の指導に対して違和感をもっている。これらは、小学校と幼稚園の両方を経験した教員だからこそ得られた概念である。そして、「一番の問題は、小学校の先生が幼児教育を知らないってことだと思います（F38）」という語りに集約されるように、小学校の教員は幼児教育の現場をもっと〈見るべき・知るべき〉であるという強い思いを抱いている。これらの概念から、幼稚園と小学校を経験した教員は、【小学校教育への違和感】をもっていることがうかがえる。

4. 3. 5 【接続への提言】

小学校と幼稚園を経験した教員は、理想的な幼保小の〈連携の思い描き〉を語っている。「交流会や移行学級（E60）」や「就学の事業（A38）」を例に挙げながら「園での姿の延長にある1年生の4月であってほしい（A24）」と願っている。また、従来の幼保小連携について「『入学式までには椅子に座っていただけるように』『名前だけは書けるように』になっていて、いまだにそういう空気感があるのかなーっていう気はしてて。幼児期の終わりまでに育てたい10の姿には、そんな姿は一つもないのに（F49）」「小学校を意識して対策をしてくるから、そのままじゃないってうかね（A24）」と批判的なまなざしも向けている。その上で、「幼児理解が子ども理解になるんですけど、子ども理解が学びの中心になるようにはしていきたいなーっていうのがまず一つですよ。どうしても、教える、やらせる、ルールを最初に学ぶ学年でもあるので、そこをどうしても中心にしたいんですけど、ここの子たちも要は納得すれば動くんですよ。だから、それが納得するような声掛けだったり聞き方だったり指導の仕方だったりだといのかな、っていう感じはしますよね。（C32）」のような〈1年担任が工夫できること〉についても語っている。加えて、「その時期は、焦らない。当たりの前なことなんですけど、すごいいろんな思いを抱えて子どもたちはいろんなところから入学していて、お友達づくり、関係づくりから始まるので、担任が一番すがりたくなる居場所だと思うので、いつも、当たり前なんですけど笑顔でね、こう包み込む温かさで安心感のある居場所をつくっていただくということかなと思います。（E67）」「最初の4月、5月、ゴールデンウィークくらいまででいいかな、少し環境を保育園・幼稚園に寄せてあげるってところ。例えば幼稚園・保育園では、子どもたちが作ったものをすぐに窓に貼ったり壁に掲示したりして、それだけで十分。子どもたちが作ったものによって雰囲気華やかになる、柔らかくなる、それだけで、小学校の教室と保育園・幼稚園の保育室がだいぶ近づいてくるって思っ。て。（F36）」と〈4月に大切にしたいこと〉についても提言している。特に、〈生活科への期待〉については、調査対象者6名全員の語りに出現していた。つまり、小学校入学当初において生活科を中心とした教育課程を編成することで、幼児期における遊びを通した総合的な学びから、各教科等におけるより自覚的な学びへの円滑な移行が可能になると考えられる。これらの概念は、【接続への提言】となるものであり、これからのA市における幼保小の接続について多くのことを示唆していると考えられる。

以上の概念、カテゴリーの意味や関係性をもとに、ボトムアップ的に構築したものが、以下に示す図1のモデル

(構造図) である。

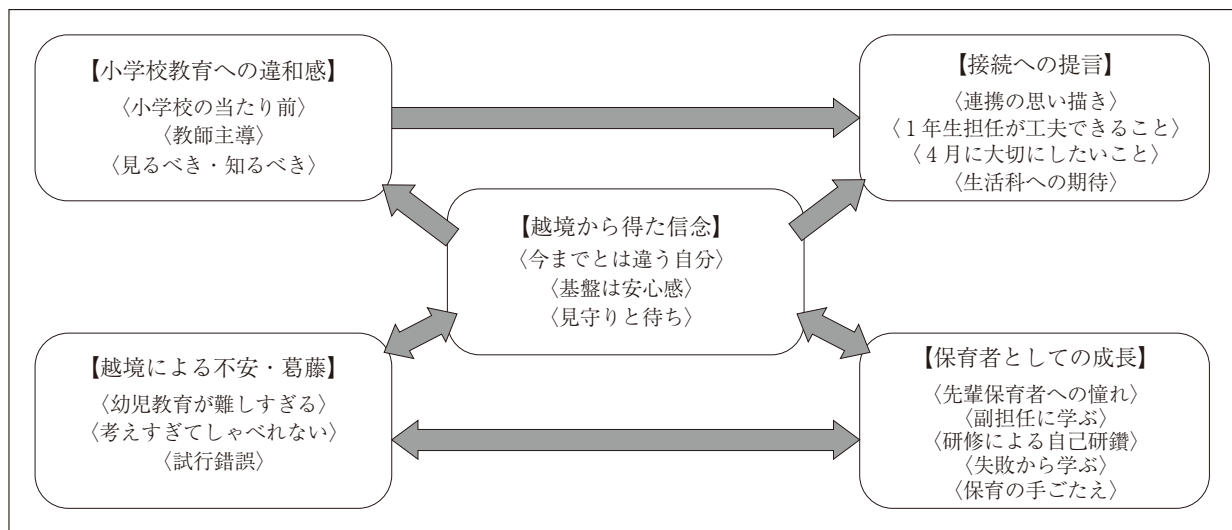


図1 幼稚園と小学校の勤務経験がある教員の意識モデル

5 考察

図1における下部3個のカテゴリの関係性について、2点説明する。また、上部3個のカテゴリの関係性についても述べる。

5.1 「省察」の深化

教師教育研究において、ショーンの「反省的实践家」⁽⁸⁾が専門職像として提起されて以降、「省察」を対象とした研究が行われるようになった。例えば、秋田(1996)⁽⁹⁾は、「技術的省察」「実践的省察」「批判的省察」という3つの次元を提起している。

ここで大切になるのは、教師の「省察」を単なる問題解決として捉えるのではなく、子どもへのかかわりという教師自身の行為の意味や意義を対象にした省察であるという点にある。つまり、教師の「省察」の深まりとは、「実践的省察」だけではなく、「批判的省察」という視点をもつことが重要だと言える。主観的で内的な振り返りに留まることなく、教師としての自分を客観的に問い直すような振り返りが、深い省察を生むということになる。これは、本研究における「〈幼児期の教育は難しすぎる〉」「〈考えすぎてしゃべれない〉」「〈試行錯誤〉」から成る【越境による不安・葛藤】と、「〈副担任に学ぶ〉」「〈失敗から学ぶ〉」「〈研修による自己研鑽〉」等の概念から成る【保育者としての成長】というカテゴリの関係性に符合する。そして、【越境による不安・葛藤】と【保育者としての成長】という「省察」のプロセスの相互作用によって、より教師自身の「省察が深化」し「問いの質が変容」する姿を見出すことができる。

5.2 「信念」の形成

オランダの教師教育学者コルトハーヘン(2010)⁽¹⁰⁾は、「省察」が進むプロセスを「行為」「行為の振り返り」「本質的な諸相への気づき」「行為の選択肢の拡大」「試み」という5つの局面に区別している。それによれば、「省察」が深まるための契機は、第3局面の「本質的な諸相への気づき」にあり、教師が授業(保育)中に行う行為や捉える問題そのものへの理解の深まりが、省察を深める鍵となる。【越境による不安・葛藤】と【保育者としての成長】という省察のプロセスに、この「本質的な諸相への気づき」、つまり本研究の【越境から生まれた信念】という概念が位置付くことになる。ここで大切にしたいのは、【越境による不安・葛藤】と【保育者としての成長】と【越境から生まれた信念】の3個のカテゴリが相互作用的な関係にあるという視点である。これらのプロセスがらせん状に何度も繰り返されることで【保育者としての成長】が一層促され、確固たる【越境から得た信念】につながっていくと考えられる。

5.3 「信念」からの提言

小学校と幼稚園を経験した教員には、揺るぎない【越境から得た信念】がある。これが基盤となり【接続への提言】や【小学校教育への違和感】が構築され则认为る。【小学校教育への違和感】は、幼児教育の観点から小学校教育を見つめ直す行為から生まれる。つまり、幼稚園に勤務し保育を経験した教員だからこそ獲得された見方・考え方である。それが、【接続への提言】に反映されていると考えられる。

本研究の目的は、小学校教育と幼児期の教育両方に携わった経験をもつ教員の意識モデルを構築することである。また、それらを明らかにすることを通して、幼児期の教育と小学校教育との接続に求められることを探究したいという筆者の願いがある。上述した【越境から得た信念】【小学校教育への違和感】【接続への提言】の3個のカテゴリーには、A市における幼保小の接続における取組へのヒントが散りばめられている。とりわけ、【接続への提言】には、滑らかな接続を推進する手がかりが凝縮されていると言えよう。この3個のカテゴリーに含まれる概念や具体例を精査・検討していくことで、A市における幼児期の教育と小学校教育の接続期に取り組むべきことが鮮明に浮かび上がってくると考える。

6 これからの方向性

6. 1 小学校入門期の教育の再確認

幼児教育の歴史を紐解いていくと、幼稚園創設期から小学校との連携や接続は常に問題とされてきた。そして、その解決に向けた議論や努力が積み重ねられ、今もなお課題となっていることが分かる。湯川（2019）⁽¹¹⁾によれば、1840年、フレーベルは従来の学校的な教育を施す幼児学校とは異なる遊びを通して幼児の自然な発達を促す教育施設「幼稚園」を創設するが、同時に、幼稚園から学習学校（小学校）の中間に「媒介学校」を構想し、その基礎段階を踏んだ後に少年期の学校教育が始まるとしていた。その後、欧米では幼稚園終了後、1～2年の「接続級」が置かれるようになるが、その背景にはフレーベルの「媒介学校」の考え方があった。20世紀初頭、日本の保育会でも幼稚園と小学校との連携をめぐる議論が盛んに展開された。中でも、1931年の第5回全国幼稚園関係者大会では、幼小の連携問題に関して答申案が作成され、文部大臣あてに建議されている。幼稚園と小学校の連携の在り方が、幼稚園関係者の総意として示されたことに意義があり、それは時代を超えて、今日の幼保小連携を考える際にも重要な示唆を与えてくれる。特に、幼稚園から小学校低学年の教育を連続的に一つの発達段階と捉える視点をもつことが、一層重要になってくるのである。

とりわけ、10年前の学習指導要領改訂において、「特に学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善すること」⁽¹²⁾と明記した生活科の果たす役割は大きい。それは、本稿における【接続への提言】の〈生活科への期待〉という概念からも明らかである。生活科は、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続という点においても、一つの大きな鍵となっている。

6. 2 信念と子ども観の共有

新しい学習指導要領等では、育成を目指す資質・能力が幼児期の教育から高等学校教育までを通じて系統的に示され、学校段階等間の円滑な接続が重視された。特に幼児期の教育と小学校教育の接続については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼稚園等と小学校の教員が共有するなどの連携を図り、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて小学校における教育活動を展開するなど、接続の一層の推進が求められている。

しかしながら、幼児期の教育と学校教育との接続は、より広範な社会的な文脈の中で検討される必要がある。例えば筆者が実践してきたような小学校への適応のみを重視したカリキュラムやプランの提示だけではなく、保育者と小学校教員の教育観の違いを共有していく連携の形を見出すことが求められる。幼児期の教育と学校教育に携わる教員に必要なことは、相互理解と目の前にいる子どもの理解である。幼保小の円滑な接続は、互いの保育・教育を理解し合い、子ども観を共有していくことから始まると考える。そのために必要なことは、対話の機会をもつことであろう。双方の顔が見える関係作りは職員同士の心理的な距離を縮め、連携のスタートとなると考える。幼児期の教育で培った力を小学校の学びに繋いでいく「接続」という視点をもち、本稿で導き出されたような「信念」や子ども観を教員として磨き続け、それらを互いに共有し合いながら、新たな連携の形を描き出していくことが肝要である。

6. 3 行政の支援

A市は生活科や総合的な学習を重視する歴史ある土地柄であり、子ども中心の教育・子どもの姿から教育の在り方を考える風土がある。それゆえ敢えて接続期のカリキュラムを導入しなくてもよいという考えや、教員の経験に基づいた小学校入門期の教育が行われている小学校もある。しかしながら、今後は若手教員が急増し、働き方改革などによって暗黙的な文化の継承が困難になることが予想される。よって、暗黙知を形式知化していくことも必要であろう。接続期にかかわる課題の解決と接続期カリキュラムの推進は、個々の幼稚園、保育所、小学校の自助努力にのみ課すべきではなく、横浜市などの取組に見られるような行政側からの支援も不可欠となる。各小学校・地域の有効な取組を持続可能なものにしていくためには、A市においてもカリキュラムとして明文化し位置付けていくことが求められる。

一方で、従来の方法論に基づくカリキュラムやプランの提示だけでは、接続についての課題を単純化してしまう恐れがある。より慎重な論点の整理と実態把握が必要となるであろう。なぜなら、同じA市内の小学校であっても、地域によって複数の幼稚園や保育園から新入生を迎える学校もあれば、一つの保育園からそのまま全員が入学する学校など、実態が異なるからである。よって、接続期カリキュラムの必要感や形態は一律ではなく、その実態に応じた内容や方法を吟味していくことが求められている。

6. 4 小学校と幼稚園の勤務経験がある教員の配置

本稿では、小学校と幼稚園の勤務経験がある教員による語りに注目し、A市における幼保小の接続にかかわる現状と示唆を浮き彫りにすることを試みた。このような教員の存在に光を当てることは、幼児期の教育がもつ価値や重要性をも照らし出し、幼保小の接続にかかわる可能性や課題を見出すことにつながっていく。今後は、このような稀有で貴重な経験をもつ教員の意図的な人事交流や配置が期待される。

7 課題

本研究における課題を以下に述べる。

第1に、分析方法に用いたM-GTAにかかわる課題である。M-GTAの特質上、生成された概念に基づく理論（本研究における「幼稚園と小学校の勤務経験がある教員の意識モデル」）は実践的活用のためのものであり、理論の応用によって検証を行うものである。そのため、本研究によって生成された理論は今後もスタートカリキュラムの実践に取り組みつつ修正していく必要がある。

第2に、データ収集における課題である。本研究では、対象とした教員がA市内の公立小学校とC大学附属幼稚園の両方に勤務した経験をもつ教諭6名に限定されている。年齢も40代が中心のベテラン層の教員から成っている。そのため、別の園や別の年代を対象とした場合、今回とは異なるモデルが構築されることが想像できる。それらを考慮した上で、読み手自身が本モデルを適応できるかを見極めながら活用する必要がある。

以上のように、今後はより多面的なデータを収集し分析を追加していくことで、さらに汎用的なモデル図の作成につながる可能性がある。

注

- 1) 上越市教育委員会学校教育課 指導主事：J氏（令和元年5月20日、8月19日）
上越市健康福祉部保育課 副課長：K氏（令和元年8月9日）

引用文献

- (1) OECD(2017). Starting Strong V:Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education. Paris : OECD Publishing
- (2) 厚生労働省、内閣府：『幼稚園教育要領／保育所保育指針／幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉（平成29年告示）』チャイルド本社
- (3) 文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社
- (4) 一前春子・秋田喜代美（2011）：「取り組み段階の観点からみた地方自治体の幼小連携体制作り」乳幼児教育学研究第20号 pp.13-25
- (5) 山口美和（2016）：「幼保小連携における『接続期カリキュラム』の意義と課題」長野県短期大学紀要70巻 pp.155-167
- (6) 白神敬介・周東和好・吉澤千夏・角谷詩織（2017）：「幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違」上越教育大学研究紀要第37巻第1号 pp.50-54
- (7) 木下康仁（2007）：『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- (8) ドナルド・ショーン（2001）（訳）佐藤学、秋田喜代美：『専門家の知恵 反省的实践家は行為をしながら考える』ゆみる出版
- (9) 秋田喜代美（1996）：「教師教育における「省察」概念の展開－反省的实践家を育てる教師教育をめぐる」森田尚人他編『教育学年報5 教育と市場』pp.451-467 世織書房
- (10) コルトハーヘン・F（2010）（訳）武田信子：『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社
- (11) 湯川嘉津美（2019）：「幼稚園と小学校の連携・接続をめぐる歴史的考察」初等教育資料No.985 pp.6-9 文部科学省NEXT64 東洋館出版社
- (12) 文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説 生活編』日本文教出版

A Case Study on the Awareness of the Teachers Who Have Worked Both in Elementary School and Kindergarten:

Based on the present situation of connection from preschool to elementary school in city A

Kaori SUGITA* · Chizuko MATSUI**

ABSTRACT

This is a case study in which interviews were conducted with teachers who had worked both in elementary school and kindergarten, and the content was analyzed using the modified grounded theory approach. The purpose of this study was to obtain clues and insights for promoting teachers' cooperation between kindergartens, nursery and elementary schools in City A by constructing a consciousness model for teachers with the rare experiences. As a result of the analysis, five categories were generated: "Anxiety and conflict by cross-border", "Growth as a childcare teacher", "Belief gained from cross-border", "Discomfort with elementary school education", and "Proposal for connection". It was found that the teachers who had crossed the border grew as teachers while deepening reflection and gained unwavering beliefs despite uncertainties and conflicts. In addition, it became clear that they had a sense of incongruity with the customs of the elementary school education, and that they had a desire to see and know more about the site of early childhood education. It can be guessed that "Proposals for connection" condenses the ideal way of teachers' cooperation between kindergartens, nursery and elementary schools envisioned from their experiences and unwavering beliefs. In this study, it was suggested that it is important to understand each other's contents of childcare and education and to share a view of child for the smooth connection between kindergartens, nursery and elementary schools.

* Jougehama Elementary School ** School Education